

【一】

出典が、古典作品を紹介する読者案内のため、現代文と古典の融合問題の形式となり、受験生の皆さんには少し読みにくい作品となったかも知れない。その点を考慮してリード文と参考口語訳を作成すると同時に、例年よりも少ない文字数の作品を扱った。細かいところに拘らず、速読しながら全体の流れをつかめるかが、ポイントとなっただろう。また、語彙力を問う問題も、積極的に出題してみた。

問一 最近の生徒たちの傾向として、「漢字の読み書きの力」そのものよりも「語彙力の低下」が、読み書きの力という結果となって表れている傾向が見られる。今回の出題も、そうした観点からの出題を試みた。

問二 【A】から【D】のいずれも、その前後にヒントとなる表現があるので、難易度としては高くない問題だろう。

その、前後にある「ヒントとなる表現」と【】部との結び付きが分かるのは、問一と同様に「語彙力」に基づくとと思われる。

問三 傍線部①の次の一行に答えは示されている。それを言い換えた選択肢を探せばよい。

問四 傍線部②の対象となる歌は、傍線部②の三行前に示されているが、実は問題用紙の二枚目にも違った歌詞で示されており、そこと選択肢との関係性に気付いてもらえれば、解答にたどり着くのは難しくはないはず。本問では、不慣れたタイプの文章であっても、ある程度の速度で文章を読む力を問うた訳である。

問五 傍線部③を注意して読めば、本作品がその直前にある「源氏・枕・伊勢・蜻蛉」と同時代の作品であると推測はできよう。そして、「伊勢・蜻蛉」についてはよく知らなくとも、「源氏・枕」が、平安時代の代表的な作品であることは、基礎学力の範囲内である。

本問の出題意図は、この「最初の気付き」にあり、こういった形で国語力を問うことに眼目があった。

問六 傍線部④を含む、前の三行に筆者と『讃岐典侍日記』の関係が明示されている。特に直前にある「たとえ読んでも若い日の私には……理解しがたかったかもしれない。」に気付ければ、ほぼ、答えに到達できたと言える。さらに、作者の感じた『讃岐典侍日記』の価値を「面白さ」という一言で指定してあるので、解答の作成にもそんなに困らなかったのではないだろうか。

問七 この問でも、語彙力を問うてみた。

それと同時に、日本文化の伝統の中心に位置する天皇に関する事柄などの「時事的事象に日常的な生活レベルから関心を持ってもらいたい。」という願いを込めた出題である。

問八 文脈を追えていけば、難しくはない問であろう。問九・問十も、発問の仕方は違えど内容としては、同じ性質の問である。

【二】

問一 大阪は「河内」や「和泉」や「摂津」に分かれるなど、畿内を中心に旧国名も覚えておこう。

問二 古文で用いられる文法規則の頻出問題。係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」に加え、結びの活用形も覚えておく。

問三 ㉑ 「じう」にある「i」は「ゆう」「yu」と読む。したがって「じゅう」となる。

㉒ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」と読む。

㉓ 「ゐ・ゑ」は「い・え」と読む。

問四 「あやし」は「不思議だ」という意味。直前の部分に「不思議だ」と感じた理由が書いてある。

問五 ㉑ 「かくて」は「このようにして」、「おはします」は「いらっしゃる」の意。「このように」が指し示す、直前をよく読む。

㉒ 傍線部の後に、高僧が獵師に対してその理由を語っている。

問六 命がけの高僧の行動、その後の獵師の行動から判断する。

問七 髪を切ることが現代でいう剃髪につながり、それが仏門に入ることを表している。直後の「法師になりて」からも判断できる。

問八 ㉑ このような「短い話を集めた作品」を説話集と呼ぶ。また、内容によって、世俗説話と仏教説話に分かれもする。

㉒ アとイは平安時代成立。ウは奈良時代、エが鎌倉時代に成立している。

### 【現代語訳】

大和国の龍門という所に一人の聖がいた。住んでいるところの名を名前にして龍門の聖と称していた。その聖の親しく知っていた男が、明けても暮れても鹿を殺すのを生業としていたが、照射という狩猟法を使う夏の、かなり暗い夜、狩りに出かけて行った。

鹿を探し回るうちに、ふと鹿の目が松明の光を受けて光ったので、「鹿がいたぞ」と、松明を振り回し振り回ししていると、確かに鹿の目が松明を反射している。よく矢の届く距離まで近づき、支えになる木に松明をひっかけ、矢をつがえて射ようと弓を振りたてて見ると、この鹿の目と目の間が、普通の鹿の目の間隔よりも近くて、目の色も変わっていたので、変だと思った。弓を引くのをやめてよく見ると、やはり変だったので、矢をはずして火を取ってみると、「どうもこれは鹿の目ではないぞ」と見て、「起きるなら起きろ」と思い、近くまで松明とともに寄ってみると、確かに疑いような鹿の皮である。「やはり鹿だ」と思い、また矢を射ようとするが、やはり目の様子が違っていたので、もうどんどん近寄ってみると、法師の頭であることがわかった。「これはどうしたことか」と思って、馬から下りて走り寄って、火を吹いて明るくして、松明の芯を折って見ると、この聖の目がまばたきして鹿の皮を引きかぶって寝ておられた。

「これはどうしたことですか。どうしてこんな格好をなさっているのですか」と聞くと、聖ははらはらと涙を流して、「お前は、私が止めるのも聞かず、むやみにこの鹿を殺す。だから、私が鹿に成り代わって殺されたなら、いくらなんでも少しは鹿を殺すのを止めるだろうと思うので、このように射られようとしてここに居るのだ。しかし残念なことにお前は私を射殺さなかった」とおっしゃるので、この男は転げまわって泣いて、「これほどまでにお考えになっていたのを、聞こうともせず、強情に殺生をいたしました」と言い、その場で刀を抜き、弓の弦を断ち切り、矢入れをみな打ち壊し、髪の手束を切って、そのまま聖に従って法師になった。その後、その猟師は聖が生きておられる間、聖に仕え、聖が亡くなったあとに聖に代わってずっと同じ所で勤行をしていたということである。

### 【三】

問一 実際の学校生活における指導の場面からの出題で、「問題を解きながら、学びを体験して欲しい。」との願いからの出題である。

品詞、敬語とも基本的な知識があれば、解答するのは難しくはなかったと思われるが、( ① ) の「動詞」については、「動詞」の表す意味が「動作」だけでなく、「作用・存在」であると学習できているかがカギとなっただろう。

問二 文学史の問題。作者と代表作だけでなく、時代の流れとともに、思潮も合わせて覚えていこう。

なお、誤答を見てみると、イの森鷗外は「舞姫」や「高瀬舟」、ウの夏目漱石は「吾輩は猫である」や「坊っちゃん」、オの島崎藤村は「若菜集」「破戒」、カの志賀直哉は「暗夜行路」「城崎にて」、クの芥川龍之介は「杜子春」や「トロツコ」などが代表作としてある。